

第3回 あかし教育懇話会 議事録

日 時：平成 24 年 9 月 21 日（金） 16：00～18：15

場 所：明石市役所分庁舎 5 階 教育委員会室

出席委員：12 名

配付資料：「よりよい明石の教育に向けて 【あかし教育懇話会 第3回資料】」

◎：座長 ○：委員 ●：事務局

1. 開会

●事務局

定刻になりましたので、あかし教育懇話会第3回目の会議を開催いたします。

2. 議事

◎座長

皆様、大変お忙しいところ、お集まり頂きありがとうございます。

「よりよい明石の教育に向けて」の1頁に、前回の会議のまとめを記載しています。あらかじめお目通しいただいているとは思いますが、改めて事務局より説明をお願いします。

●事務局

それでは資料の1頁からご説明します。

前回の第2回の会議で、まずはいじめ対策について、様々な取組を説明した後に、懇話会としてはその取組を見守ることで確認をさせていただきました。

学区再編が明石の教育にもたらす影響についても話し合いを行いました。その中で出された意見を1頁の下に記載しています。「学区拡大にはメリットもあるが、そのための一定の学力が必要である」、「入試システムの変更に合わせた進路指導も必要である」、「明石の保護者は総合選抜制度で育った人が多いため、学区再編についてもっと啓発に取り組むべき」、「現在明石の普通科高校は県立しかないが、市をあげて高校を育てる取組が必要」、「現在中学校で実施している習熟度別授業を、小学校にも広げてはどうか」、「学力調査では、明石の子どもは平均正答率は全国や兵庫県並であるが、無回答率が高い」などが主なご意見でした。

続いて2頁をご覧ください。前回、前々回の会議で、「確かな学力の向上」をテーマとして掲げることとなり、今回資料を作成していますが、まず「そもそも学力とは何か」についても議論いただきたいと思い、「学力の定義」を記載しています。「学力の定義」という条項ではありませんが、学校教育法30条第2項に、小学校教育の目標が記載されています。まず「①基礎的な知識及び技能、いわゆる基礎的な知識」、「②基礎的知識を及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能

力、いわゆる応用する力」、「③主体的に学習に取り組む態度、いわゆる学習意欲」の3つに一般的に分けられます。さらに、これを支える学習習慣を身に付けることが重要ということで、学力向上のためには、学力の3要素に学習習慣を加えた4要素を育成することが必要であると言われてしています。

3頁は、これら学力向上のための4要素の相関関係であり、①から⑥まであります。基礎的知識と応用力は相関関係にあり、それらを伸ばしていくための学習意欲と学習習慣にも相関関係があるということで、4要素をうまく組み合わせて伸ばすことが学力向上につながると言われています。本会議の中では今まで、学力を判定するものさしとして、高校入試や大学入試など結果について議論がなされてきましたが、それは学力がもたらす一部分であり、全てではないということは皆様の共通認識だと思います。学力とはどのようなものかをしっかり認識したうえで、議論を進めていきたいと思っています。

4頁は、「学力向上施策の方向性」で、学力向上のための4要素の育成・向上に向けた教育体制全般における諸施策の実施について記載しています。学力向上の中心は当然学校ですが、それを支える教育委員会の体制、家庭学習習慣の充実、地域のサポートなどが相関的に絡み合っていくことが重要だと考えています。施策の方向性は①から⑥です。明石市としても、「あかし教育プラン」などの中で、これらの方向性に沿った施策に取り組んでいく考えです。

参考資料として、8頁から10頁に「国の学力向上施策の考え方」を記載しています。国は直接的には国立の学校ももっていますが、間接的な支援も行っています。全国的な学習指導の指針となる学習指導要領を改訂し、それが着実に実施されるための様々な支援策を行なう、というのが国の考え方です。9頁は、実際に国が取り組んでいる事例、10頁は、モデル校における学力向上等の方策に関する調査研究として平成23年度の県下の事例を記載しています。11頁は「他市での学力向上プランなどの取組」です。各市とも国の考え方に沿った同じような取組も多いですが、市の財政状況などからそれぞれに特色ある施策がなされています。

続いて「明石市が現在取り組んでいる施策」についてご説明します。5頁をご覧ください。

まず「ことば力」の育成です。今回の学習指導要領の改訂では、各教科の指導計画に言語活動を位置づけ、ことば力を育むことが掲げられています。言語は学習活動の基盤となるものであり、その能力を伸ばすことが学力向上の第一歩になります。また、言語はコミュニケーション能力である感性や情緒の基盤であり、豊かな心を育むうえでも、言語に関する能力を育むことが求められています。市内の各小中学校では、毎朝始業前に、読書活動や音読活動を行っています。

次に「学びと育ちを積み重ねる取組の発展と充実」です。学校教育には、子どもが社会で生きていくうえで必要な確実な基礎、基本の教育が求められています。またその確実な定着がなければ、それらを活用する発展的な学習はできません。そのため、読み・書き・計算の定着に力を注ぎ、明石版ドリルなどを活用して、取組を行っています。

次に「少人数指導の推進」です。現在明石市では、小学4年までは35人以下学級を完全実施しており、5年生、6年生においても35人を超える学級には市の非常勤講師を加配して、少人数指導や複数指導の授業に取り組んでいます。少人数指導の利点は、

学習過程において個人差が生じやすい教科でもきめ細かな指導ができること、教員と児童・生徒間、児童・生徒同士のコミュニケーションが一層図れるなど、学習指導効果とともに、生徒指導上の効果も期待できることです。主に小学校では算数、中学校では、数学や英語で少人数授業や習熟度別学習を実施しています。文科省の調査などでも、習熟度別学習は、その後の学習意欲に顕著な効果を上げています。今後とも、習熟度別学習は効果を検証しながら推進する予定です。

次に、小学校における教科担任制の実施です。従来、小学校では、高学年での音楽、家庭科、図工などを除き、基本的に担任が全ての教科を担うことが一般的でしたが、中学校で教科担任制になることによる中1ギャップの解消、小学校の教師も専門性を生かすことでより良い指導につながることを目的に、小学5年、6年の理科、社会などで、教科担任制を実施しています。

以上の取組は、各学校がそれぞれの特徴や地域性を踏まえ、総合的に学力向上プランを策定して実施しています。お手元に、小学校3校、中学校3校の「『確かな学力』向上プラン」をお配りしていますので、参照ください。

次に、校種間の連携です。近年子どもを取り巻く教育環境が大きく変化していることに伴って、保育所、幼稚園と小学校の間に小1プロブレム、小学校と中学校の間に中1ギャップが発生していると言われていています。そのため、保育所・幼稚園と小学校、中学校との間で情報の共有や、カリキュラムの工夫によって、系統的、継続的な教育の実現が求められています。校種間の連携を図って、幼児期から小学校、中学校まで通した教育課題を検討したり、幼児、児童、生徒間の交流や、教職員の研修を行うなど具体的な取組を行なっています。

児童、生徒に学習内容を確実に身に付けさせるためには、教員の指導力の向上、指導方法や指導体制の充実は欠かせません。教育委員会では、教員の指導力向上のための研修を行うなど取り組んでいます。また丁寧な指導を行うためには、教員一人一人が児童、生徒と向き合う時間の確保が欠かせないという点から、効率的な運営や文書量の見直しにより、教員が児童、生徒と向き合う時間の確保を進めています。

説明は以上です。

◎座長

ただいまの説明に対して、何かご質問等はありませんか。「確かな学力の向上」の定義については、2～4頁になります。5頁で、現在教育委員会で取り組んでいる内容についても説明がありましたが、もっと具体的な内容についてのご質問でも構いません。いかがでしょうか。

○委員

5頁の、中学校における少人数授業や習熟度別学習は良いことだと思います。少人数授業のメリットはきめ細かさコミュニケーションという説明でしたが、集中力のほうがもっと大きなメリットだと思います。人数が少なければ、教師もやりやすく、生徒も集中しやすいと思います、私が子どもの頃は中学校は1クラス20人でしたが、自分の経験からも集中力は大事だと思います。

習熟度別学習についても、1つのクラスでは、もっともできる子どもと、もっともできない子どものどこに照準を合わせるかが難しいため、良いと思います。できる子どもにとっては下のレベルに合わせると授業はつまらなく感じ、上のレベルに合わせるとできない子どもはついていけなくなります。ただし、その際に成績が替わった場合、入れ替えはどのようにしているのでしょうか。学期ごとか、学年ごとなのか、そのあたりをお聞きしたいです。

低いクラスの子どもは劣等感を感じるため、マイナス面の影響も考えられます。それを解消するためには、どのような取組をされているのでしょうか。

数年前から、教員免許の10年ごとの更新制度があると聞いています。5頁にも関係し、教員の資質向上にも関連します。教員免許更新制度について、少々説明いただければありがたいです。

◎座長

ただいまのご質問で、まず習熟度別学習の実施について、いかがでしょうか。

○委員

中学校の習熟度別学習は、主に英語と数学について全市的に行なっており、特に数学はすべての学校で実施しています。クラス編成の仕方は学校によって異なると思いますが、私の経験の範囲では、「基礎をよく理解できていて応用編を学習したい」グループと、「基礎をもっと徹底的に学習したい」グループは必ずしも半々ではありません。どちらのグループに入るかは、子どもの希望によって決めています。境界線の範ちゅうにいる子どもなど、自分で決めることが難しい場合は、教科担任や学年担任が保護者と本人と相談しながら決めています。年度途中で、グループを変更したほうがよいと判断される場合は、懇談を行なってアドバイスします。特に数学においては、あくまでも個人の希望優先であることは、どこの学校でも共通だと思います。

劣等感についてですが、自分で選んだグループであり、ある程度成績が伸びてくるため、劣等感は生まれません。今のところ、劣等感については特に問題なく、むしろ「これができるようになった」という喜びのほうが大きいという感触です。

◎座長

中学校では、数学部会でも検討しており、その検証も行なっていると思います。大方が自分で入るグループを決めており、グループを3つ4つ設けている学校もあるようです。ほとんどの子どもは、あまり無理ではないグループを選び、「分かった喜び」を感じており、劣等感はあまり感じていないと聞いています。

入れ替えについては、どうですか。

○委員

私が知る限りでは、1年を通して同じグループで実施しており、数学は基礎より応用の方が人数が多いと聞いています。

◎座長

教員免許の更新制度についてはいかがですか。

●事務局

教員免許は、従来は一度取得すると更新の必要はありませんでしたが、教育職員免許法の改正により、平成21年4月から、幼稚園、小学校、中学校、高等学校では10年に1回の更新が必要になりました。各大学で開設する30時間以上の免許状更新講習の課程を受講し、大学が発行する修了証明書を受ける必要があります。

○委員

大学も実施するのは大変ですが、大学の存亡にもつながるため結構力を入れており、神戸大学、京都大学などで実施しています。30時間といっても、専門科目に応じた時間や一般教育で必要な時間などの枠組みが決められているため、私立大学では、すべての教科で実施するのではなく、理系に強い大学は理系を、社会系に強い大学は社会系をというように、強みとする科目について開講しています。大学のほうもやるからには、相当力を入れて実施しています。

高校教員からも、もう一度勉強し直すことができ、「行ってよかった」という声をよく聞きます。

◎座長

教育内容としても新しいものがどんどん入り、学習指導要領も改訂されるため、よい機会になると思います。

免許状更新講習は受講して届出しなければ免許が失効してしまうため、校長先生はもれがないような指導が必要になります。

○委員

受講すれば、必ず更新してもらえるのですか。

○委員

大学が「きちんと受講したことを認める」という修了証書を出すため、自動的に更新できる、というものではありません。

○委員

出ない場合もあるのですか。

○委員

理屈ではありえますが、ほとんどないと思います。

◎座長

受講だけでなく、受講した内容をチェックするような簡単なテストのようなものがあると聞いています。

他になければ、2頁について意見交換をしたいと思います。まず1つ目の「基礎的な知識及び技能＝基礎的知識」についてです。ここをしっかりと身に付けることが重要だと言われています。狭義の学力でとらえると、基本的には学校が取り組むことが大部分で、習熟度別学習などの積み重ねや、指導方法の改善などがあると思います。一方で小学5～6年で人数が多い学級には、市で単独に臨時講師を配置したり、生徒指導や特別支援関連での配置を行ったりするなど、市で取り組んでいるものがあります。実現性は一旦置いて、もっと市で取り組んではどうかというご意見をお願いしたいと思います。

○委員

6年生の習熟度別学習の実施状況はどのようなのですか。

◎座長

小学校の習熟度別学習の検討を行なっていることは聞いていますが、今のところ、具体的な実施状況については聞いていません。国でも子どもがきちんと理解しているかどうかを把握するために習熟度別学習の取組を推奨しているため、今後はぜひ検討すべきだと思いますが、いかがでしょうか。

○委員

小学校では少人数授業が中心で、習熟度別学習まで実施している学校はまだ少ないと思います。中には、同じ算数の時間内で、計算の部分だけ習熟度別に分かれる方法を取っているところはあると思います。ただし、現在は、2つのグループに分けて担任と加配の教員が担当し、できる子どもや分かる子どもを増やしていくというやり方が中心です。どの時期から子どもを習熟度別学習に分けていくかは、慎重に行なう必要があると思います。

◎座長

今までは、人数で単純に分けるケースが多かったのですが、緩やかにテーマごとに分けるようなやり方から歩み出してはどうかという思いがあります。そのような時期に来ているのではと思います。

○委員

できる子どもとできない子どもが同じグループにいる場合、「面白い、面白くない」という差が出てきて、できる子どもはもっと高いレベルを目指し、できない子どもは苦手意識をもち、中学ではさらに拒否反応を示すようになります。段階を踏んだ取組があればと思います。子どもには、苦手な教科にいくプレッシャーがあると思うため、苦手なものこそ、夏休みの学習の機会を利用して、「そんなことはない。楽しくて分かるようになるよ。」と子どもを引っ張ったり、コーチングしたり、ステップアップできるも

のがあればと思います。

◎座長

夏休みの利用など、限定的に実施するのも一つのやり方だと思います。「問題はできても説明ができない」という子どもの理解を深める方法としても、グループの中で説明をするといった指導をするなど、いろいろな実施を検討すべきではないかと思っています。

市の取り組みとして、「もっとこんなものを」というアイデアはありませんか。

○委員

地域の力をもっと使えないかと思っています。東部のほうは高齢化していますが、スクールガードなども行っており元気な高齢者も多いため、放課後や夏休みに、学校を開放して計算や漢字を教えるなどを行なってはどうかと思います。これが放課後子ども教室を広める一つの手段になるのではと思います。別のデータからは、高齢者が生きがいをもって生活することで、介護費用の削減につながるということも聞いています。高齢者に限ったことではありませんが、潜在的な力を生かして誇りをもって地域に参加できる場があればよいと思いますし、子どもたちにとっても高齢者を大事にする心が芽生えると思います。

放課後子ども教室の現状について教えていただければと思います。

◎座長

あかし教育プランでも地域ぐるみの取組をうたっており、ありがたいことだと思います。貴崎小学校区は、共働き家庭が多く放課後家に帰っても保護者がいないところが多いため、元教員が無料で集まれる場所を設けて、地域の方と共に宿題をみたり子どもたちと一緒に遊ぶなどからスタートしています。松が丘小学校区では、元校長先生が中心になって自治会に働きかけ、宿題や遊びを行なう子どもの居場所を提供しています。これらについては、市から補助を行なっています。

このような活動が、学校を支える一つの方向として、もっと地域に広がっていければと思います。

○委員

明石西高等学校の生徒が地域の小学生に勉強を教えたり、明石北高等学校でも昨年の夏休みに西明石の場所で中学生に勉強を教えるなどを行なっています。高齢者にも参加していただきながら、高校生が小学生や中学生を教えていければ、学校教育の枠組み以外での、地域で子どもを育てるよい手段になると思います。

◎座長

明石市は、高校生が得意分野を生かして保育所や幼稚園、小学校などに関わっている例が、他市より多いと思います。幼児や小学生から見れば中学生は比較的年齢が近いですが、「高校生はすごい」という感情をもつため、高校生にとってもヒーロー的な体験

になり、相乗効果としてよいと思います。

○委員

16 頁に「独自の学力テストの他都市の事例」がありますが、自分の経験を振り返ってみると、このようなテストは学校教育の中で行なうにしろ、地域独自で行うにしろ、明確な目的があると子どもの励みになると思います。高齢者や高校生など教える側にとっても、効果が分かれば次を考えることにもつながると思います。

小野市から資料をいただいたのですが、「ハートフルチャレンジおの検定」には大人バージョンもあり、面白いと思っています。このように、何らかの形で自分の到達度が分かり、次の目標が立てられるようなものであればよいと思います。

小野市では、これ以外にも、11月に小学5年生全員と父兄を対象にした講演会など、様々な取組を行っています。このような市をあげた取組は面白いと思います。小野市の「ハートフルチャレンジおの検定」について、もっと詳しく分かれば教えていただきたいと思います。

◎座長

特定の学年に集中した取組も一つの方法だと思います。小野市では、川島隆太先生と連携し、「脳は難しい問題では一部分しか働きませんが、単純な計算問題や漢字の羅列問題では前頭葉が働く」ということから、脳全体を鍛えるという観点で科学的アプローチを行なっています。

○委員

小野市の「ハートフルチャレンジおの検定」は、平成16年から実施しているようですが、今までの成果が分かれば教えていただきたいと思います。自己満足で終わっているのか、全体的にレベルアップしているのか、そのあたりはどうなのでしょう。

子どもにとっては、大きな目標というより、目の前のものを一つ一つクリアしながら階段を上っていくことは楽しいことであり、次の目標をもつことへの興味も出てくると思いますので、目標を持たせることはよいと思います。

◎座長

スモールステップを設けることは、子どもの意欲付けには効果的だと思います。学習意欲を高めたり応用力を身につけることは、基本的には学校教育が中心ですが、それを周辺から支える地域の取組として、今のようなご紹介がありましたので、明石としても具体的な取組については、今後議論していくこととします。

以前に、「市として、スポーツに力を入れたり、部活動を支援して発表会の場を設けるなどはあるが、学力面において子どもの意欲を高めるしくみはどうなっているか」という問題提起がありました。義務教育の使命は基礎的な力をつけて全体の底上げをすることですが、それぞれの段階で、さらに伸びる子どもをしっかりと伸ばしていくという観点もあります。このあたりについて、何かご意見はありませんか。

○委員

教員の採用にあたっては、学力だけでなく、人間味豊かな人材を採用していただきたいと思います。子どもは先生が好きになれば、いろいろなことに頑張るようになります。子どもの素質を伸ばすことのできる先生を増やしてほしいと思います。

◎座長

宇野千代さんの「陽気は美德、陰気は罪悪」という言葉をよく例にとるのですが、教員が明るい人であれば、子どもも前向きになるため、子どもの意欲を引き出すという点でも、採用時には基本的に前向き、積極的、明るいということが基準になっていると思います。

○委員

先生から言われて、「子ども同士で教える」ということを学校でやっているようですが、子どもの間では、教える側のできる子どもが、周りから「調子にのっている」ととらえられることもあると聞き、それは問題だと思っています。子どもには算数のドリルなどの時間が与えられているようですが、時間が余ったらこっそり宿題をしているそうです。時間があれば、算数ドリルよりレベルが高いものもできるような弾力的な取組であればよいと思います。

◎座長

足踏みをするような取組では問題であり、教師の指導のやり方に関わる問題だと思います。子どもたちのグループの中の関わらせ方は十分考える必要があると思います。

○委員

来年度から中学生の「科学の甲子園」ができますが、野球好きの子どもと同様に、理科好きの子どもの個性を伸ばす良い機会だと思います。義務教育のため学校単位では難しいかもしれませんが、明石でチームを作って参加してはどうかと思います。

○委員

昨年、高校生の「科学の甲子園」がスタートしましたが、第1回目が今年3月に、野球の甲子園にちなんで西宮で開催されました。各高校で補欠を含む6名でチームを作るのですが、すべての高校にそのための指導ができる先生がいるとは限らないため、全国大会で代表になるような高校は、野球以上に常連校になると思います。関東圏とは選抜が異なりますが、兵庫県は県予選を経て全国大会に行くこととなります。

○委員

中学は学校単位では難しいと思いますので、市単位でチームを作って、科学が好きな子どもの励みになればと思います。

○委員

他の都道府県では中学校の選択制を行なっているところもありますが、主に子どもが希望する部活動に参加できるようにすることが目的となっています。選択制が、理科や英語などの教科を目的として活用されるようになることもよいと思います。

このような選択制以外にも、「科学の甲子園」のご提案のように、チーム明石を作ることも面白いと思います。

◎座長

弁論大会には明石からも参加しており、私も毎年見っていますが、いつも感動しています。今年は県大会にもいくなど素晴らしい結果を出しています。自分の生き方や考え方を発表するよい機会となっていますが、このような、子どもたちがより高いレベルを目指して頑張る機会を提供することも一つの方策になると思います。

○委員

補足ですが、物理、数学、化学などの世界的な科学オリンピックを目指す高校は、大学とも連携をとっています。中学校バージョンを行なう場合にも、中学の先生だけでは難しく、高校や大学の先生の応援も必要だと思います。

○委員

先ほど、放課後学習の話がありましたが、少し観点を変えて、生涯学習センターの活用なども考えてはどうかと思います。

◎座長

どこかでモデル的に実施してしくみ作りを行なうことも考えられます。子どもたちの意欲を高めることで全体の向上につながると思います。伸びる子どもに様々な機会を提案することは意義があるという観点で、いろいろとご意見をいただきましたので、今後検討していきたいと思います。

○委員

先生にとって、野球については甲子園を目指すなど集中できる環境がありますが、同様に、理科や英語の先生にもその教科に集中できる環境があればと思います。英語や理科の先生は担当教科以外にも多くの仕事を抱えています。特定の分野を伸ばす機会を作る際には、その分野に集中できる環境が必要だと思います。

○委員

本日の神戸新聞に、「特別支援教育コーディネーターを配置した」という記事が掲載されていましたが、そのコーディネーターは教科も部活も担当しているため、教科指導に本来の力が発揮できるのかが懸念されます。やはり、集中できる環境は必要であり、

そのためには人材確保が重要だと思います。ボランティアという話もあるため、必ずしも予算的な問題にはならないと思います。教育委員会で、人材バンク的なものをもっと充実させてはどうでしょうか。以前に学生ボランティアに助けてもらったこともあります。そのようなものが、より大きくなって学校や地域の活性化につながっていければと思います。

また少人数学習をする場合、教室は2つ必要なため、小学校や中学校では、それだけの施設や設備など、学習環境の充実もぜひお願いしたいと思います。

◎座長

一方では高校や中学校では教室が不足しているという切実な状況や、地域差のアンバランスなど、難しい問題もありますが、学習環境の充実も大切だと思います。

地域の人が自分の得意なものを活かして行なう小学校でのゲストティーチャーなど、外部講師の生かし方も重要だと思います。講師におまかせではなく、学校側が、よい効果が出るような設定を考える必要があると思います。そのあたりの状況についていかがですか。

○委員

多くの方に外部講師として入っていただいております、特に高年クラブの方が多いです。ただし、やみくもに入れるのではなく、学習課程の中で「子どもに何を提供するか」というベースを明確にして位置付けなければ、学習には結びつかないと思います。講師にとっても地域とのつながりとしてやりがいにつながる効果もあるため、そのような面を大切に考えて、一緒に取り組んでいければと思います。大きなイベントを開催する場合には、計画段階から一緒に参加してもらって、知恵をお借りするような形が、少しずつ増えているように思います。PTAの方にも、子どもと一緒に育てていく支援者として参画していただくことが望ましいと感じています。このような地域の行事やスクールガードなどを通して、子どもたちが地域の力を安全なものにとらえながら活動できる場が増えていると思います。

小学校では、習熟度に応じた学習までは入り込めないのが現状だと思いますが、どの学校も基礎的な部分をどれだけ子どもに植えつけるかに焦点をあてて、取り組んでいると思います。1つの教室に複数の先生に入ってもらい、理解ができていない子どもの横で先生が指導したり、特別支援が必要な子どもが勉強しやすいように導いていくなど、1対1の取組を行なっています。

教科として学んでいることを、もっと現実的な形で理解を深めるために、地域の人々の力を借りてコミュニケーションなどを通して行なうことをやっています。

◎座長

学校側は、うまくコーディネートしなければ、せっかく地域の人に参加してもらっても生かせませんし、子どもにとっても「お客さんが来た」だけで終わってしまいます。計画的に、意図的に子どもたちの意欲を高める方向に向かわせるしかけが必要だと思います。

昨日の新聞に、学力テストの結果から「小学校6年生の半数が、掛け算、割り算の基本的な部分を理解していない」というショッキングな記事が出ていました。抽象的な思考が入る中学年や、あるいは学年を絞るなどで、しっかりとベースの部分を徹底して指導する必要があると思います。小学校と中学校をうまくつなげて段差を少なくするためにも、兵庫県では、小学5年～6年で教科担任制を導入する動きがあります。

中学校と高校は、進路面でのつながりは定期的にあると思いますが、それ以外の面でのつながりについていかがでしょうか。

○委員

学校説明会はあっても、教育内容的な行き来はありません。明石北高校では現在スーパーサイエンスというのをやっていますが、大学の先生を招いて土曜に、数学コロシウムという高校の授業とは違う形のものをやっています。これを中学校に応用して中学バージョンを作ろうと考えもあつたのですが、高校で手一杯でそこまで行きませんでした。「科学の甲子園」という話も出ましたので、このようなことも面白いのではないかと思います。

◎座長

最近は大連携という、大学の先生を招いて授業をしてもらったり、あるいは高校生が大学に出向いて授業を受けるということもよく聞かれますが、このあたりはいかがですか。

○委員

どの高校でも、何らかの形で大学の先生との連携をとっています。

◎座長

国から「学校間の連携」という言葉が出てきますが、実際にどのように連携を図っていくかが問題です。小中でも中高でも、一貫のしくみは難しいです。現在の全国的な小中や中高のつながりについても資料を出してもらい、明石としての議論を行なうかと思えます。

学力のベースになる部分では、まずは現状がどうかという問題があります。国の学力テストや、今回の資料の16頁の他都市の例がありますが、このあたりについてご意見はありませんか。

○委員

定数的に把握する必要があると思います。そのためには、現状から出発して数値目標を継続的にフォローしていく必要があります。その中で市独自の学力テストが位置付けられると思います。「確かな学力」にあるように、単なる知識だけでなく応用力や表現力も必要ですが、数値目標などで測らなければ分からないと思います。学校の先生も大変だと思いますが、業者に任せきりでは、子どもに対する愛情が感じられないため、できれば自作のものが望ましいと思います。

○委員

明石では、読み・書き・計算の9年間のドリル教材「明石版ドリル」を作っていますが、その活用状況はどうなのでしょう。せっかく作っているのに、これを活用しない手はないと思うのですが。

◎座長

「明石版ドリル」は問題数が多く、CD版にして渡しているのですが、学年に関係なく随時取り出すことができるため、使い次第では、子どものステップアップなど効果的に活用できると思います。学校には、それ以外にもドリル的なものも多くあるため、使い切れていないものもあると思いますが、「明石版ドリル」は、市内の先生が尽力してくれたよいものだと思いますので、どのように活用を促していくかが重要だと思います。

○委員

自作のテストのメリットとしては、子どもに対する愛情が伝わるという面もありますが、作ることによって先生の力にもなるという点があると思います。以前、高校の県下一斉模試がありましたが、入試がセンター試験になって全国レベルになったため、兵庫県単独で行なう意味が薄れ今はやっていません。県下一斉模試は先生が集まって作るのですが、先生の力量アップになっていました。労力面もあるので一概には言えませんが。

◎座長

ある町では、日頃の実力テストを先生が集まって作ろうという動きがあるようですが、大変な労力が必要な反面、子どもたちの状況に合わせて皆で作るというよい面もあるようです。方法は別として、状況把握として必要ではないかという点についていかがですか。

○委員

必要だと思います。将来にもつながると思います。

子どもたちの環境にはハード面、ソフト面とありますが、ハード面の充実も大事だと思います。またできるだけ小中一貫で、明石は伝統的に非常に強いというものに力を入れていると言われることが重要だと思います。目標をもって子どもが意欲をもって取り組んで、達成感をもてるような環境を充実させて応援したいと思います。そのような取組は、子どもが大人になっても生きてくると思います。

◎座長

夢や目標をもって取り組んで達成感を味わうことが、将来の自分の仕事にもつながるというご意見でした。

現状把握についてはいかがですか。

○委員

子どもたちは自分が置かれている立場を認識する必要がありますし、保護者も子どもの現状を分かっておく必要があります。保護者は子どものスタンスを分かった上で、ある程度現実的な中で、子どもたちに夢をもたせることが必要だと思います。

できる子どもができない子どもを教えると「生意気だ」と思われるという話がありましたが、それは言葉の力だと思います。スポーツの文献もよく読みますが、沖縄の興南高校が甲子園で優勝したときのインタビューで、選手の受け答えが素晴らしく、「本当に高校生か」と思うほどでした。興南高校の監督は練習のときに各選手に必ず、「今日の目標は何か」と聞き、話すことを促しているそうです。選手は最初はうまく話せないのですが、3年も経てばきちんと自分の意見が言えるようになるそうです。自分の意見が言えるようになれば、社会に出てもしっかりとやっていけるということで、スピーチ力を磨かせているということです。

スピーチ力を小学校から養っていけば、言葉によって相手を傷つけることも分かるようになり、相手に勉強を教える場合にも相手を傷つけない言葉で、どのように伝えれば良いかということが身についてくるようになります。言葉のスキルアップは重要であり、勉強の成果にもつながっていくと思います。

◎座長

市として、独自にテストを行なうことについて、現場としてはいかがですか。

○委員

大変な作業になると思います。問題作成から、採点、分析まで労力が必要です。国の全国学力・学習状況調査を利用して学校におろすこともよいのではと思います。相対的なとらえ方ではなく、どのように指導につなげていくかというふうに積極的に活用する方向がよいのではと思います。

◎座長

相対的評価だけでなく、結果をみて個別に指導をどのように行っていくかにつなげなければ、費用をかけた意味がないと思います。現在は抽出校以外の学校が実施する場合は、費用も負担して自前で採点や分析を行う必要があります。

やり方はいろいろあると思いますが、懇話会としては、何らかの方法で実情調査を行なう必要があるということで皆様の合意が取れたかと思います。今後は教育委員会で実施に向けて検討していただくことになると思います。

先ほど説明ができていない6～7頁について、事務局から説明をお願いします。

●事務局

今まで学力の要素や体制について説明しましたが、今度は手法について、説明いたします。このような体制をしっかりと回していくためには、まずは現状の把握が必要ではないかと思います。どのような業務にも当てはまることだと思いますが、学力向上にもPDCAのサイクルが必要です。施策を実施してその結果を分析して評価を行い、それを

フィードバックして新たな施策につなげていくことが必要ではないかということで資料としてまとめています。

様々な場所で学力が発揮されますが、学力テストが学力を測る目安となるということで、参考資料として、14頁以降に全国の学力テストの動向や事例を掲載しています。この中で、小野市の「ハートフルチャレンジおの検定」は、通常の学力テストとは若干異なり、目標を設定してモチベーションを上げることも狙いとしています。これは一般向けに販売もされていますので、家庭で子どもと一緒にこなすこともできます。今回は資料を準備したいと思いますので、参考にさせていただきたいと思います。また「科学の甲子園」についても資料を準備したいと思います。本日の議論の中で、ご要望があった件については、事務局にてできるだけ調べて資料を用意したいと思っています。

◎座長

次回、事務局にて準備していただく資料を確認します。

明石版ドリルの活用状況、「ハートフルチャレンジおの検定」の詳細、科学オリンピック関連です。

これ以外に、資料のご要望はありませんか。

○委員

学区再編についてですが、学区再編でもっとも影響を受けるのは加古川と明石という話も耳にしますので、想定される影響についてお聞きできればと思います。

学力テストを実施する際には、中学校の教室不足や勉強に集中できる環境がないなどの、施設のハード面が問題になると思います。環境がよくなければ能力アップにも影響があると思うため、そのようなハード面の要望についてお聞かせいただきたいと思います。

◎座長

学校からいただいている要望はありますが、それを公開するには、個別の検討が必要だと思います。全体として、学校の望ましい環境について議論することはできると思いますし、以前からテーマにあげられていますので、今後議論していきたいと思います。

次回以降の会議の準備として、学校間の連携について、小中一貫や、中高一貫の事例など、ベースになる資料があればと思います。学校規模についての明石の現状と将来推計、学校選択制の全国的な状況等も資料として準備していただければと思います。

今回は、先ほど確認した資料提示を踏まえて意見交換したいと思います。特に委員から出された「地域で支えるしくみ」について、さらに具体的に話し合っ、事務局で実施に向けて検討できる形にまでもっていければと思います。話の糸口として、学校間の連携や学校規模の適正、選択制について話ができればと思います。

次のテーマについては、いかがですか。

○委員

これから少子高齢化社会を迎えるため、学校規模については議論しやすいのではと思

います。

○委員

小学校では、学級規模として少人数ということが大きな影響になり、子どもたちが落ち着いて勉強でき、学力向上にもつながるといえると思います。少人数学級は4年までなので、4年から5年になる段階で例えば4クラスが3クラスになりますが、教室が同じ大きさの中で子どもの体は大きくなることから、約30人のクラスが、40人のクラスになり教室が一杯になります。県の方針としては、5～6年生は教科担任制としていますが、物理的条件が変わることで、4年生までと人数の勝手が違うことから、5年生から難しくなる傾向があります。そのような中で、資料の13頁にあるように、豊田市が小学1年生から通して少人数学級を実施していることに魅力を感じます。そのような環境も作っていただければと思います。

○委員

実際、4クラスから3クラスに変わって授業参観に行くと教室がすごいことになっており、実感できる話です。

◎座長

国からは中学校を35人学級にという概算要求が出されていますが、ぜひ実現できるよう頑張っていただきたいと思います。まずは、学校規模や学級規模の明石の現状を資料として出していただき、学校規模の適正化や少人数学級についても議論したいと思います。

資料は先ほど確認した、明石版ドリルの活用状況、「ハートフルチャレンジおの検定」の詳細、科学オリンピック関連についてもお願いします。

○委員

次回冒頭の15～20分くらいで再度、学力テストについて議論をお願いしたいと思います。本日学力テストを行なうことは確認しましたが、皆様が、学力テストはどのようなやり方がもっとも効果的でよいと思っているかについて、ご意見をお聞きしたいと思います。学力テストも最終的には学校に戻ってきます。学校の先生が結果を把握して、子どもの弱いところに力をつけることにつながっていきます。最終的には学校の先生が活用できることが重要だと思いますので、そのあたりについて、ご意見をお聞きしたいと思います。

学力テストの裏には、それを公表することで常に学校間の格差を生むということがあります。大阪では激しいやり取りがなされています。学校間競争につなげるのかどうか、絶対評価として一人一人の子どもに返すことにつなげるのか、道筋をつけていただければ、教育委員会として参考になります。

◎座長

大事であると同時に、公表の扱い方などシビアな問題だと思います。ぜひ皆様の意見

交換を行っていただきたいと思います。次回は盛り沢山ですが、まずは学力テストについてさらに中身に踏み込んで、シビアな議論を行なっていきたいと思います。

○委員

他市の例も詳しくお聞きできますか。

○委員

分かればお願いしたいと思います。会議としては最初から100点満点にはいかないと思いますが、子どもたちに100%効果が返ってくるようなやり方にするには、他市のよい点をおさえた上でスタートするべきではないかと思います。

◎座長

それでは、その部分をもっと掘り下げて様々な角度から議論いただければと思います。さらに次回資料提供していただく部分についても議論を行ないます。県内の他市の取組事例についても情報収集ができればお願いしたいと思います。

3. 閉会

◎座長

それでは、本日はこれで議事を終了します。

●事務局

本日は長時間に渡り活発な議論をいただきありがとうございました。本日ご意見をいただいた明石版ドリルの活用状況、「ハートフルチャレンジおの検定」の詳細、科学オリンピック関連について、次回資料を提供させていただきます。他市の学力調査についてもご用意します。学校の施設規模や将来人口推計などは、以前調査したものを改めて提供させていただき、資料等は事前に委員の皆様へ送付させていただきます。

本日の会議の中身を精査し、次回の会議の冒頭でおさらいさせていただきたいと思います。

前回の議事録については、ホームページに掲載させていただきますので、持ち帰って精査して頂き、修正がありましたら、10月2日（火）までに事務局までご連絡いただきますようよろしくお願いいたします。

次回の懇話会は10月10日（水）16時から、本日と同じく分庁舎5階教育委員会室で予定しておりますので、よろしくお願いいたします。正式な開催通知は改めてご連絡いたします。これで、第3回あかし教育懇話会を終了いたします。ありがとうございました。

以上